

光の器を

高橋 信次

私は天界にあっても、決して、沈黙はしない。我を信じ、法を行ずる者には、常に、その者のなかにあって、光と安らぎと、生きる喜びを与えるであろう。なぜなら、法は光であり、慈悲であり、久遠の愛と安らぎあるエネルギーでもあるからだ。

人の魂は、この世とあの世とを生き通しの生命である。両者の間を、さえぎる障壁はないものない。障壁としてあるものは、五官六根による迷いだけである。肉の身を自分と見、肌に触れぬものはなにもないとする自己限定の心だけである。これほど恐ろしい偽我不是。人はいずれは、感覚以外の世界の住人となり、生命の尊さ、素晴らしさを認識しなければならぬものだ。

いま、そなたに伝えたいことは、法の原点にもどり、自己をつくれとということである。地上界は、地上の人間の住む世界であるが、地上はそなたの双肩にかかる。美醜、善悪、一にかかって、地上の人間の心一つにある。

天上にあって、そなたに光を与える手を差しのべるとしても、そなたの心が五官におぼれ、六根の輪を広げれば、天上と地上は、ますます厚い壁をつくり、光のかけ橋は蜃気楼のように、頼りないものとなるであろう。

そなたが、心を尽し、煩惱にうち勝ち、法を依りどころとして生活するとき、光のかけ橋は、いよいよたしかなものとなり、そなたに慈悲と愛の力を貸し与えることができるであろう。

我は、いま、天上にあって、そなたの想いと行動を見守っている。誰が、どこで、何をなしたか。百人の心を一瞬にして読みとることができ。百人とは、たとえであり、千人、万人の心についても瞬時に見て知ることができるのだ。これは、肉の身と、そうでない者の中がいいであろう。

もちろん、実在界といつても、光の量に区域がある、諸靈の住む世界はさまざまであるが、我の住む天界は、不可能なことは何一つない。では、なにゆえにこれが可能か。人の心は靈子線によって天界につながっており、人類の靈子線は、我的視界に、すべておさまり、我的心から離れることがないからである。そなたたちが、己を正し、己を光の器とするとき、神の光はそなたの器に満たされ、安らぎと調和を与えてはおかない。

我を信じよ。

我を信ずるとは、法にそつて生きることだ。

盲信、狂信は、信の世界ではない。

信の在り方は、そなたたちが、大宇宙の不变的神理にしたがつて、生きるということなのだ。

我は光なり。

我は法なり。

そなたは、たがいに補い合い、助け合ひ、手をとりあって、前に進め。そのとき、我は、そなたに、光の道をさし示し導いてゆくであろう。信じて、疑うことなけれ。